

# I 糖業の概況

## 1 海外の動向

### (1) 砂糖類概況

世界の砂糖需給見通し（平成 20 年 7 月、F. O リヒト社公表）によると、07/08 年度の全世界の生産量は 1 億 7,038 万トンの予想で、06/07 年度の 1 億 6,696 万トンより 340 万トン増加した。EU が生産量を削減し、アフリカ、北・中央アメリカ諸国、オセアニアの生産量もほとんど増加していない一方、アジアの中国、インドネシア、パキスタン、タイの生産量の増加が著しい。

一方、消費量については、前年度より 3.0% 上回る 1 億 5,690 万トンが見込まれている。これは、10 年ほど前からは年平均およそ 2.4% の割合で上昇していたが、特に直近の 3 年間は平均 2.9% で増加している。その要因としては、砂糖の低価格と余剰、アジアの強い経済と人口増加、穀物価格高騰、コーンスターチシロップとの競争緩和などが挙げられる。

期末在庫は 2,080 万トンとなり、在庫-需要比率（stock-to-use ratio）は前年度の 49.2% から 53.6% に増加する見込みである。

### (2) 砂糖の国際価格の推移

2007 年 4 月～2008 年 3 月のニューヨーク現物相場の月平均価格を見ると、前年度からの下落傾向が続いて、ブラジルの増産など供給過剰感が市場に広がり 4 月～4 月は 10 セント台で推移、7 月には思惑筋の買いに一旦は 12 セント台に上昇したものの、8 月から 11 月までは 11 セント台で推移、12 月から 2 月にかけて投機筋の買いにより上昇に転じ、2 月は 15 セント台に達したが、3 月には売りに転じて 14 セント台に下落した。

## 2 国内の動向

### (1) 砂糖類概況

平成 18 年産の甘味資源作物の国内生産は、てん菜については、作付面積がやや減少し、6 月の日照不足や 8 月中旬以降の高温多雨による天候不順から前年産より単収も下がり、総収量は 392 万 3,000 トン、産糖量も 63 万 6,000 トンとなった。

一方、さとうきびは、収穫面積が前年より増加し、一部地域で台風や干ばつなどの被害を受けたが、おおむね生育に適した天候に恵まれたことから、前年を上回る 124 万 7,000 トン（分みつ糖分）、産糖量も 15 万 5,000 トン（同）となった。

砂糖の消費は、平成 15 砂糖年度においては 223 万 7,000 トンと、前年を 2.6% 下回り、平成 16 砂糖年度は前年比 0.4% 減の 222 万 9,000 トン、平成 17 砂糖年度は同 1.9% 減の 216 万 5,000 トンと減少傾向が続いていたが、平成 18 砂糖年度は同 0.7% 増の 218 万 1,000 トンと増加に転じた。

加糖調製品の輸入状況（19 年 4 月～20 年 3 月）は、「コーヒー調製品」が前年比 19.4%、「調製した豆」が同 5.3%、「ソルビトール調製品」が同 1.4%、「粉乳調製品」が同 16.9%、それぞれ減少した。一方、「ココア調製品」が前年比 1.4%、「その他の調製品（ソルビトール調製品を含まない）」が同 6.0% の増加であった。この結果、これらの品目全体では、前年比 4.4% 減少の 42 万 2,000 トンとなった。

異性化糖の移出数量（標準異性化糖換算）の動向は、第 1・四半期では、5 月、6

月が前年を上回り前年同期を 0.5%上回った。第 2・四半期は、7月・8月がわずかな増加であったが 9月に 10%と大幅な増加となり、前年同期を 3.2%上回った。第 3・四半期は、11月が前年を下回ったが、10月、12月が前年を上回り前年同期を 6.4%上回った。第 4・四半期は、1月・2月が前年を上回り前年同期を 0.3%の微増であった。

この結果、19年度の移出数量は全四半期を通して増加し、前年度より 2.4%増の 81万トンとなった。

## (2) 砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場（東京）上白大袋の価格は、精糖メーカーが、国際粗糖相場の下落に伴う原料糖の調達コストの低下を反映して、建値を引き下げたことから、平成 18年 11月 10日に 2円/kg 下落し、154～155円/kg となって以来、この水準で推移している。

異性化糖の日経相場大口需要家向け（東京・タンクローリーもの）価格は、原料とうもろこしの国際価格の高騰や海上運賃の上昇等によるコスト増に伴う異性化糖企業の製品価格への転嫁により上昇傾向にあり、6月 1日付けの日経相場で 4円/kg 値上がりし、110～114円/kg（果糖分 55%もの、中心値）となり、その後も原料とうもろこし価格の一層の高騰もあり、2月 8日には 6円/kg 値上がりし、116～120円/kg（果糖分 55%もの、中心値）となった。

## 3 国内産糖の生産動向

### (1) てん菜糖

#### ア てん菜の生産

平成 19年産てん菜の作付面積は前年産比 798ha 減の 6万 6,566ha、栽培農家戸数は前年産比 434 戸減の 9,416 戸、一戸当たりの作付面積は前年産比 0.23ha 増の 7.07ha となった。

北海道平均の 1ha 当たりの収量は 64.6 トン（前年産 58.2 トン）、総収量も 429万 7,000 トン（前年産 392万 3,000 トン）と平年並みの収穫となった。また、根中糖分は 16.7%（前年産 16.4%）と平年並みの糖分となった。

#### イ てん菜の生育概況

てん菜の植付け開始は、平年並みであった。

生育初期においては、5月に入ってから降雨もあり比較的良好であり、6月上旬は少雨で生育はやや停滞したが、中旬以降は気温が高く多照に推移したため生育は順調に進み平年並みとなった。7月前半は低温・少雨傾向で、後半にはオホーツク海側を中心に降雪・大雨があり生育は一時停滞した。8月前半は日照時間が少ない状態であったが気温は高めに推移し、また、後半は高温・多照に経過した事で生育は回復し平年並みとなった。9月以降も気温の高い傾向が続き降雨もあり根部は順調に肥大して、根重は平年を上回った。根中糖分については 10月上旬までの高温等の影響により糖分の上昇が暖慢となり低糖分となった。

病害虫については、8月以降の高温・多湿の影響により太平洋側を中心に褐斑病がやや多く発生した。その他の病害虫については平年並みであった。

#### ウ てん菜糖の生産

19年産の産糖量は、産糖歩留が16.50%（前年産16.21%）とほぼ前年並で、1ha当たりの収量が前年と比べ高収量となったため70万9,198トン（前年産63万5,702トン）となった。このうち、てん菜原料糖は25万4,898トン（前年産18万4,302トン）で総産糖量に対する割合は35.9%（前年産29.0%）となった。

(2) 甘しや糖～鹿児島県産～

ア さとうきびの生産

19年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より323ha(3.6%)増加して9,378haとなった。

作型別割合では、夏植え20.3%（前年産25.3%）、春植え20.2%（同19.7%）、株出59.5%（同55.0%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より666kg(10.6%)増加して6,932kgとなった。地域別では、与論地域が2,548kg(67.8%)増加して6,306kg、沖永良部地域が1,504kg(25.0%)増加して7,518kg、奄美地域が1,015kg(18.4%)増加し6,519kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より82,693トン(14.6%)増加して、65万67トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より510戸(5.1%)減少して9,550戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

気温、降水量、日照時間が平年を下回っていたため、生育がやや遅れた。

○生育旺盛期（6月～9月）

奄美地域では梅雨明け以降、降雨がない状態が続き干ばつが懸念されたものの、7月の台風4号の降雨により生育は順調であり、8～9月も定期的な降雨があったため順調な生育となった。

種子島では6月の生育は平年並みで推移したが、7月の台風4号、8月の台風5号の影響で生育が阻害され平年より遅れたものの、その後は気温が高めで日照時間も多かったことから順調な生育となった。

○生育後期（10月～収穫期）

気温は平年並みか高め、日照時間が長く、少雨で経過し生育は夏場の定期的な降雨だったことから生育は順調だった。

ウ 甘しや糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績を0.03ポイント下回り12.58%、含みつ糖の歩留は前年実績を0.52ポイント下回り11.85%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より10,200トン(14.5%)増加して80,783トン、含みつ糖は、前年実績より5トン(0.5%)減少して914トンとなった。

(3) 甘しや糖～沖縄県産～

ア さとうきびの生産

19年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より16ha(0.1%)減少して1万2,659haとなった。地域別では、沖縄地域が84ha(1.2%)増加、宮古地域が36ha(0.9%)増加したが、八重山地域では136ha(7.9%)減少した。

作型別割合では、夏植48.3%（前年産50.1%）、春植11.9%（同12.2%）、株出39.7%（同37.7%）となった。

10 a 当たりの収量は、前年実績より 857 kg (14.7%) 増加して 6,705 kg となった。地域別では、沖縄地域が 570 kg (10.8%) 増加し 5,846kg、宮古地域が 1,185 kg (17.0%) 増加し 8,148kg、八重山地域も 1,266kg (22.8%) 増加し 6,811kg となった。そのため、さとうきびの生産量は前年より 107,518 トン (14.5%) 増加して、84 万 8,802 トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より 273 戸 (1.5%) 減少して 17,475 戸となった。

#### イ さとうきびの生育概況

##### ○生育初期 (3月～5月)

各地域の月平均気温は、3月はより高く、4～5月は前線の影響等もあり平年より低いか平年並みとなった。降水量はほぼ全域で概ね平年並み又は平年より少ない値で推移した。本島地域では、茎長・生葉数は概ね平年以上であったが、宮古地域、八重山地域では小雨傾向により干ばつの影響がみられた。

##### ○生育旺盛期 (6月～9月)

各地域の月平均気温は、平年並みか、平年より高めで推移した。降水量は6月、8月及び9月とも、梅雨前線や熱帯低気圧及び台風等の影響で曇や雨の日が多く各地域とも平年より多かったが、7月は台風第4号の影響を受けた沖縄本島地域、久米島地域以外は高気圧の範囲内だったため平年より降水量が少なかった。

また、期間中は、6個の台風が接近し、第4号、第11号及び第12号については、倒伏、根離れ、葉の裂傷及び潮害などの被害が生じた。

##### ○生育後期 (10月～収穫期)

各地域の平均気温は、10～1月にかけて平年よりも高い状態が続いた。10月、12月及び1月は、平年との差が0.4～1.9℃あり暖冬であった。2月は平年より低く、3月は平年並の推移となった。

降水量は、10月、12月、1月及び2月は各地域とも高気圧に覆われ晴れの日が続いたが、途中気圧の谷や前線の影響等により平年並となった。しかし、11月及び3月は、台風第23号や低気圧の影響等により各地域で平年より多くなった。

八重山地域では10月上旬の台風第15号の影響により葉片裂傷や根浮き、折損及び潮害などがあつたが、全島的には降水量に恵まれ生育は順調であった。

#### ウ 甘しや糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より0.16ポイント下回り12.19%、含みつ糖の歩留は前年実績より1.24ポイント下回り13.44%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より1万996トン(13.0%)増加して9万5,894トン、含みつ糖は前年実績より419トン(5.3%)増加して8,335トンとなった。